

カツコウの動機

片田舎にあるコンビニ。深夜アルバイトの大田原がレジに悪戦苦闘しているところに招かねざる客（森永）がやってくる。

コンビニ（夜）

上手側にカウンターがあり、その中で大田原がレジを触っている。

明転。

大田原「何で開かないんだよ。頼むよ。」

開いてくれよお」

レジから甲高い警告音が鳴る。

大田原「（慌てふためき）ごめんごめん
ごめん！ これだから機械は嫌
なんだよお」

入店音が鳴る。下手から真っ赤な目出し帽以外は黒で統一された出で立ちの森永が登場し、ゆっくりとした歩みでカウンターへ向かう。森永の手には、ナイフが握られている。大田原はレジの操作に夢中で気が付いていない。

大田原「もう、どうしたら開くんだよ。」

昔ながらに叩いてみるか？ いや、そんなことで開くなら、金庫の意味がないよな。いつそのこと、工具を使ってバラしちゃうか？ いやいや、例えバラせたとしても、復元できる自信がない。んー、でも、やってみる価値はあるか。あつ、肝心の工具がないじゃないか」

森永、カウンター前に到着すると無言のまま立っている。

大田原「（視線を上げながら）いや、確か売り場にあったような」

大田原、目の前にいる森永の存在に気

が付く。

大田原「いら、しゃいま、せ」

森永、手に持っているナイフの切先を大田原に向ける。

大田原「客じゃない……、ですよね？」

森永、何も喋らない。手は大きく震えている。

大田原「ご、強盗？」

森永、小刻みに頷く。

大田原「です、よね。そんな格好で唐揚げ棒とか買いませんよね。あの、非常に言い難いことなんです」

森永、突然、おずおずと歌い始める。

森 永「(歌) し、静かな湖畔の森の影から」

大田原「えっ？」

森永、しばし沈黙するが、手に持った凶器をゆっくりと振りかぶりながら再び歌い出す。

森 永「(歌) 静かな湖畔の森の影から」
大田原「(輪唱) 静かな湖畔の森の影から」

森 永「えっ？」

大田原「えっ？」

数秒間の沈黙。

大田原「えっ？ 歌うんですよね？」

森 永「あつ、うん。いや、何でもない」

森永、踵を返し足早に出口(下手)に向かう。

大田原「ちよ、ちよっと待ってください」

森永、大田原に背中を向けたまま立ち止まる。

大田原「あなた『カッコウさん』の偽物ですよね？」

森永、向き直るが、質問には答えない。

大田原「ですよね？（森永を指差しながら）真っ赤な目出し帽に、真っ黒なシャツとスキニーパンツ。それに、革手袋とデカイナイフ。しかも全て真新しいじゃないですか。この日のために買い揃えたんですか？ いやあ、巷のウ

ワサ通りの装いですね」

森永「い、いや、その、あの」

大田原「いいんですよ。挑戦に失敗はつきものです。それに何事も真似から入ったほうが手っ取り早いんですから、恥ずかしがる必要なんてないですよ。それはそうとして、なぜ『カッコウさん』の模倣をしようと思ったんですか？」

森永「なぜ、って……。」

大田原「警察に通報はしませんから安心してください。だから、僕の質問に答えてくださいよ」

森永「は、はあ……。」

大田原「さあ、教えてください」

森永「道を踏み外したかった」

大田原「ってことは、あなたは今まで真っ当な人生を送っていたわけですね」

森 永 「幼稚園から大学までエスカレーターだよ」

大田原 「あなた学生さん？」

森 永 「いや、社会人だよ。それも公務員だ」

大田原 「おお、ド真っ当な人生の歩みですな」

森 永 「だろ？ だから踏み外したくなっただ」

大田原 「へえ、なんか普通ですね」

森 永 「そう、俺の人生は普通すぎるんだ」

大田原 「いや、そうじゃなくて、動機が普通だな、って」

森 永 「動機が？ 俺は、それすらも普通ってことか。本当にどうしようもないな」

大田原 「あと質問の答えになっていません。“踏み外したかった”ってというのは、強盗をする理由にな

りますけど、『カッコウさん』を模倣する理由になりません」

森 永 「そうだなあ。強いて理由を挙げるとすれば、ここ最近、テレビやネットのニュースは『カッコウさん』の話題ばかりだろ？

それに模倣犯が一人も出ていなかったから、やってみようかな、って」

大田原 「それって“自分にもできる気がした”ってやつですか？」

森 永 「多分、そんな感じ」

大田原 「教科書通りの模倣犯ですね」

しばしの沈黙

森 永 「こっちも質問していいか？」

大田原 「どうぞ」

森 永 「どうして、そこまで『カッコウさん』に拘るんだ？」

大田原 「そりゃあ、ファンだからです」

森 永 「ファン？ 変な趣味をしてるな」

大田原 「そうですか？ カッコイイじゃないですか」

森 永 「童謡を歌いながら人を刺し殺して、金を奪う奴がカッコイイのか？」

大田原 「テレビやネットの情報を鵜呑みにしてはダメですよ」

森 永 「どういうことだ」

大田原 「『カッコウさん』は輪唱に誘うんです」

森 永 「輪唱に誘う？」

大田原 「そうです。輪唱に誘うんです。

そして、輪唱ができたなら、何もせずに去っていきます。でも、

輪唱ができなかったら……」

森 永 「できなかつたら？」

大田原 「(人を刺すしぐさをしながら)ズブツ、ズブツ、ズブツ、ズブツ、

ズブツ、ズブツ、ズブツ、ズブツ、

森 永 「殺しちゃうのか」

大田原 「はい、あっさり」と

森 永 「にしても、『カッコウさん』の目的は何だろうな」

大田原 「ネットのウワサによると、殺人で性的興奮を得ているらしいですよ」

森 永 「ナイフの抜き挿しと性器の抜き挿しがイコールで結ばれちゃっているのか。とんだ変態だな」

大田原 「はい、ド変態でカッコイイですよね」

森永、お手上げのしぐさ。

大田原 「あつ、言い忘れていたことがありました。(レジを指差し)レジが開かないんですよ。ですから、あなたにお金をお渡しすることができません」

森 永 「いけないよ」

大田原 「えっ、いけないんですか?」

森 永 「強盗に失敗したんだから、もういいよ。で、どうするんだ?」

大田原 「何がです?」

森 永 「コンビニでレジが使えなかったら困るだろ」

大田原 「確かに困りますよね。でも、大丈夫ですよ。ジャストで払えるお客さんにしか売らなきゃいいんですから」

森 永 「それは不味いだろ。ちよっと俺に見せてみる。こう見えても機械には強いんだ」

大田原 「こう見えても、って目出し帽を

被っている人に言われましても」
森 永 「(カウンターの上にナイフを置き) いいから、いいから」

森永、レジカウンターを飛び越えようと
とする。

大田原 「(森永を制止しながら) いや、大丈夫です。レジなんてどうにでもなりますから!」

森 永 「(制止を振り解きながら) 安心して俺に任せとけ」

大田原 「いやいや、困ります」

二人は揉み合いになり、森永はカウンター内にずり落ちる。数秒の沈黙後、森永は絶叫しながらカウンター内から

飛び出てくる。森永の手は赤く染まっている。(客席からカウンター内にあるのか見えない)

大田原「あの、大丈夫ですか？」

森永「だ、大丈夫なわけないだろ！」

(自分の手を見ながら) これ、何なんだよ！

大田原「(足元を見ながら) し、死体？」

森永「何で疑問形なんだよ！ 紛れもなく死体だろ！ おい、どういふことだよ」

大田原「何と言いますか。色々あったんです」

森永「お前が殺ったのか？」

大田原「ぼ、僕じゃないですよ」

森永「おいおい、しらばっくれるなよ。まさか……」

大田原「まさか？」

森永「お前、目撃者の俺も殺す気だろ。強盗である俺を引き止めたりして、どうも変だと思っただんだ」

大田原「何を言っているんですか？」

森永「お前はシリアルキラーに憧れている節がある。日頃から人を殺したいと思っただんだろ？」

大田原「そんなこと思っていないですよ」

森永「いや、お前は俺と同じ模倣犯なんだよ。巷に溢れている『カウさん』の情報をシャワーのように浴びて勘違いしたんだ。“自分にもできそう”ってね」

大田原「一緒にしないでくださいよ。僕は犯罪マニアなだけです」

森永「犯罪マニアが犯罪者になった、ってことだろ？ 認めるよ。自分が殺人鬼になってしまった、ってことをさ」

大田原「だから、僕じゃない、って何度

森 永 「この状況では言い逃れできねえよ。第一、足元に血みどろの死体が転がっているのに平然としているような奴を信じられると思うか？」

大田原 「僕は元葬儀屋だから死体を見慣れているんですよ。肉の塊にか見えないんですよ」

森 永 「葬儀で寝ている綺麗な遺体とズブズブ刺された血だらけの死体とでは、感じるところが全く違うだろ。お前、ますます怪しいな」

大田原 「そんなに僕を殺人犯にしたいのであれば、きっちり証明してくださいよ。ほら、早く、証拠を出してください」

森 永 「はあ？ 何だ、その態度は。だったら、お前が先に殺人犯では

ないと証明しろよ」

大田原 「はあ？ 先に疑い始めたのは、あなたじゃないですか。だから先に証明するのは、あなたの方ですよ」

森 永 「はあ？」

大田原 「はあ？」

二人 「(怒鳴り気味) はあ？」

二人はカウンター越しに睨み合う。

突然、水洗音が鳴る。大田原と森永は音の鳴る方(下手)を見る。数秒間の沈黙後、ドアの開閉音が鳴り、下手から黒いスーツ姿の男が登場。男は腹を擦りながら、下手側で立ち止まる。

男 「ふう……、危うかった。アイスの食べ過ぎだなあ」

森 永「(大田原に視線を移して) あ、

あれ、誰？」

男 「(カウンターの方を指差し) あ

っ！」

森 永「えっ？」

男、足早にカウンターへ向かう。男は歩きながら、上着の内側からナイフを取り出し、森永に向ける。森永はカウンターの上にあるナイフに手を伸ばすが、大田原が取り上げる。

森 永「おい、何だよ。早く、それ返せ

よ！」

大田原、ナイフをカウンターの下に落とす。

男が森永の前に到着。男、切先を森永に向けたまま黙っている。

森 永「えっ？ な、何？ 誰？」

男 「(歌) 静かな湖畔の森の影から」

森永、大田原を見る。大田原、無言で頷く。

森 永「(輪唱) し、静かな湖畔の森の

影から」

男 「(歌) もう起きちやいかかとカ

ッコが鳴く」

森 永「(輪唱) もう起きちやいかかと

カッコが鳴く」

男、ナイフを指揮棒のように振る。

男 「(歌) カッコー、カッコー」

森 永 「(輪唱) カッコー、カッコー」

男 「(歌) カッコ、カッコ、カッコ」

森 永 「(輪唱) カッコ、カッコ、カッコ

ッコ

男、森永が歌い終わると指揮を止め、
無邪気に笑い、拍手をする。

男 「おお、お兄さん、お上手。いや

あ、楽しかったあ」

男、ナイフを上着の内側に戻して、森
永に握手を求める。森永、怖々と、そ

れに応じる。

男 「(腹を押さえ) あっ！ ヤバい

……。また、波が来た。わ、悪

い、もう一度、トイレ借りるぞ

！」

大田原 「は、はい。どうぞ、ごゆっくり」

男、腹を押さえながら、小走りで下手

へ消える。

しばしの沈黙。

森 永 「な、なあ」

大田原 「なんでしよう」

森 永 「(下手を指差し) あれ、つて…

…」

大田原 「はい、『カッコウさん』です。

しかも本物のね」

森 永 「ほ、本物、って……」

大田原 「(カウンター下を指差しながら)

“これ”をやったのは彼です」

森 永 「マジかよ。にしても、お前、よく無事だったな」

大田原 「そりゃあ、ちゃんと輪唱しましたからね」

森 永 「お前から輪唱のことを聞いていなければ、今頃、俺は……。危なかったあ」

大田原 「でしょ？ 僕に感謝してくださいよ」

森 永 「つていうか、言っとけよお！」

大田原 「何を？」

森 永 「本物の『カッコウさん』がトイレにいる、つてことをだよ。それを知ってりゃ、お前と無駄話なんかせずに、さっさと家に帰ってるよ！」

大田原 「僕は言おうとしましたよ。でも、

あなたは僕を殺人鬼だの何だの、つて捲し立てたから言えなかつたんですよ。それに……」

森 永 「それに、何だよ」

大田原 「ウワサを一つ検証したかったんです」

森 永 「ウワサ？ 何だよ、それ」

大田原 「最近、ネットで囁かれているウワサなんですけどね。『カッコウさん』の模倣犯の末路を知りたかったんです」

森 永 「ウワサだと模倣犯はどうなるんだ？」

大田原 「本物の『カッコウさん』に殺されます」

森 永 「だろうな。模倣犯に明るい未来は待っていないよな」

大田原 「どうやら原型を留めない程に切り裂かれるらしいですよ。です

から、模倣犯がいたとしても、『カッコウさん』の手によつて“いかなかった”ことにされるんです」

森 永 「ほう、だから、今まで模倣犯が出ていなかったのかあ」

数秒間の沈黙。

森 永 「つてことは、俺、ヤバくない？」

大田原 「そうですね。実のある検証が
できそうです」

森 永 「だから、そういう大事なことは早く言え、つて！ 俺、切り裂かれるじゃん！」

大田原 「そうになったら、僕が責任をもつてネットに検証結果を流しますよ。だから、安心してバラバラ

になつてくたさい」
森 永 「やっぱり、お前は気が触れてい
るよ！」

大田原 「いやいや、僕が一方的に悪いわけではありませんよ。あなただつて、いつでも立ち去ることができたのに、どうしてここに留まっただんですか？」

森 永 「それは……、どうでもよくなつたんだよ。模倣すら満足にできない自分に嫌気が差したという
か……」

大田原 「自暴自棄になつた、と？」

森 永 「まあ、そんなところだ」

大田原 「だったら、“win-win”じゃないですか」

森 永 「はあ？」

大田原 「あなたは捨て鉢になつた。僕は検証がしたい。(両手のピースサインを何度も曲げながら)ほ

ら、「win-win」

森 永「ほら、じゃねえよ！俺は死にたいわけじゃないんだ。じゃあ、俺は帰るからな」

森永、小走りで下手に向かおうとするが、水洗音とドアの開閉音が鳴る。男が下手から再登場。

森 永「あつ」

男 「あつ、さつきは、どうも」

森 永「（後退りし）い、いえいえ、こちらこそお」

男 「あつ、そうそう！ どうして、

俺の真似をしようと思ったの？」

森 永「いやあ、それは、何と言いますか……」

大田原、カウンターの外に出て、二人の元へ向かう。

大田原「（森永を指差し）やはり、この人を殺すんですか？」

森 永「おい、デリカシーの欠片もない疑問を投げかけるな」

男 「ねえ、どうして？ 有名になりたかったの？」

森 永「いや、違う」

男 「だったら、どうして？」

大田原「“自分にもできる気がした”かららしいですよ」

男 「へえ、そうなんだあ」

大田原「で、切り裂いちやうんですか？」

森 永「（大田原の口を手で塞いで）ちよつとお前は黙ってる！」

男 「それだけ？」

森 永 「はい？」

男 「それだけの理由で俺の真似をしたの？」

森 永 「そう、ですけど？」

男 「（上着の内ポケットからナイフを取り出し）だったら……」

大田原 「おお、やっぱり殺すんですね。」

解体作業中、写真撮ってして良
いですか？」

森 永 「いやいやいや、ちよ、ちよっと
待って！」

男 「“自分にもできる気がした”だ
けじゃ、（森永の目出し帽を指
差しながら）こんなことやろう
と思わないよ。動機の根っ子に
は、まだまだ程遠いなあ」

森 永 「そう言われても……」

大田原 「あつ、この人、ド真っ当な人生
に飽き飽きして、道を踏み外し
てみたかった、とも言ってみてまし

たよ」

森 永 「（大田原を指差し）お前は喋り
すぎだ！」

男 「んー、それでも納得いかないな
あ。真っ当な人生を簡単にドロ
ップアウトしたいと考えるもの
かねえ。君にとつて、それなり
の挫折があつたんじゃないの？」

大田原 「あつたんじゃないの？」

しばしの沈黙。

森 永 「し、失恋したんだよ」

数秒間の沈黙。

大田原「普通う！」

森 永「俺にとつては大きな挫折なんだよ」

男「で、どんな失恋だったの？」

森 永「それも言わなきゃダメ？」

大田原「体を細切れにされなくなかったらね」

森 永「（大田原を指差し）お前、完全に罪人側の立ち位置だけど大丈夫か？」

男「教えてよ。その平凡な失恋をさ」

森 永「わかったよ。言うよ……。婚約者を寝取られたんだよ」

大田原「（笑いながら）だつせえ」

森 永「私は風いだ海が嫌いなもの」

大田原「何それ？」

森 永「別れ際にそう言われたんだよ」

男「君の日常に波風は皆無だったんだな」

森 永「だから、波風を立たしてやろう」

と思つたんだよ」

大田原「そんなことしても、婚約者は帰ってこないでしょ」

森 永「そんなの分かつてるよ」

男「君の婚約者を寝取つた間男は、知っている人なのか？」

森 永「いや。でも、気になって俺なりに調べたんだ」

大田原「復讐しようとも思つたの？」

森 永「俺がそんなことができる人間に見えるか？」

男「どつからどうみても“そんなことが出来る人間”だよ」

森 永「あんたに言われたくないよ」

大田原「で、どんな奴なの？ その間男は」

森 永「チャラチャラしたヒモ野郎だよ」

大田原「へえ、写真とかないんですか？」

森 永「隠し撮りしたやつがあるよ」

森永、ポケットからスマホを取り出し、操作する。

森 永「(スマホを大田原に差し出しながら) ほら」

大田原「(スマホを受け取り) ほお、こいつが、あなたの婚約者を寝取ったヒモ野郎ですかあ。ん？」

森 永「どうしたんだよ」

大田原「こいつ、どっかで見たことあるんですよねえ。気のせいかなあ」

森 永「まさか、気のせいだろ」

大田原「あつ、思い出した」

大田原、森永の手を掴みカウンターに連れて行く。

森 永「何するんだよ」

大田原「(カウンター内を指差し) ほら、この人！」

森 永「(顔を逸し) 血だらけの死体なんて見たくねえよ」

大田原「いいから見てくださいよ。(スマホと死体を交互に指差し) ほら、この人」

森 永「(嫌々、死体を見る) いやいやいや、ないないない」

男、カウンターに歩み寄る。

男 「そいつは俺の正義に反したんだよ」

森 永「は？ どういうことだよ」

男 「そいつは詐欺の常習犯なんだよね」
大田原「えっ？ 狙って殺した、ってこ

とですか？」

男

「俺は無差別な狩りはしないよ。狩られる側には、それ相応の理由があるんだよ」

大田原「おお、それは新情報だ」

森 永「お前ら、何の話をしているんだよ」

大田原「(死体を指差し)この人、客だ

ったんですよ。だから、偶然、巻き込まれて殺されたと思っていたんですよ。でも、実際は違って、『カッコウさん』は、この人を殺すべくして殺していたんです。言わば、私刑ですよ。へえ、あなたの敵である間男は、詐欺師だったんですね。もしかして、結婚詐欺もやってたりして」

森 永「私刑か。お、俺も間男と同じように殺されるのか？」

男

「いや、動機の根っ子が悲劇だったから殺さないよ」

森 永「よ、良かったあ」

大田原「さすが『カッコウさん』。かっこいいなあ」

電話の着信音が鳴る。

大田原「あつ、あなたに着信ですよ」

森 永「(スマホを奪い取り)あつ」

大田原「誰から？」

森 永「お前には関係ないだろ」

男「そのリアクションだと、“元”婚約者からでしょ？」

森 永「そ、そう」

男「早く出なよ」

森 永「う、うん」

森永、下手側に向かい、電話に出る。

(通話は黙劇)

大田原 「『カツコウさん』、一つ質問し

ていいですか？」

男 「いいよ」

大田原 「どうして、輪唱できたら殺さな
いんですか？」

男 「楽しいから」

大田原 「それだけ？」

男 「うん」

森永、戻ってくる。

男 「“元”婚約者は、何だった？」

森永 「泣きながら謝ってた。それに今

から会いたい、って」

大田原 「ヨリが戻せそうで良かったです
ね」

男 「ヨリを戻すの？」

森永 「分からない」

男 「そっか。殺すんだったら、俺が
手伝うよ」

森永 「いや、遠慮しておくよ。じゃあ、
俺、行くよ。色々と迷惑かけた
な」

大田原 「そうですよ。強盗なんて、もう
懲り懲りです」

男 「バイバイ」

森永、下手へ消える。

男 「レジ、開いた？」

大田原 「それが開かないんですよ。すい

「ません」

男 「謝る必要はないよ。んー、金は諦めるかな。じゃあ、俺も帰るよ」

大田原 「そうですか。いやあ、貴重な体験でした」

男 「君、変わってるね」

大田原 「あなたほどではありませんよ」

男、下手へ向かうが、舞台中央で立ち止まる。

男 「あつ、そうだ」

大田原 「何です？」

男 「俺、『カッコウ』じゃなくて、『フクロウ』なんだよね」

大田原 「えっ？」

男 「あの歌には二番があるんだよ。」

それじゃあね。バイバーイ」

男、下手へ消える。

大田原、呆然としているとレジが開く。

大田原 「これだから機械は嫌なんだよお」

暗転

(了)